

# 殉教と順応主義——アントニー・マンディと 『サー・トマス・モア』

道家英穂\*

## 序

『サー・トマス・モア』(c1592-93)は、ヘンリー八世の治世下(1509-47)で、大法官にまで上り詰めながら、王の離婚とイングランド国教会の樹立に反対し、断頭台の露と消えたトマス・モア(1478-1535)の伝記的な芝居である。この作品にはシェイクスピアの筆が入っており、一時期、新たなシェイクスピア作品が発見されたのではないかと話題になったが(玉木、松田 211-15)、現在は、アントニー・マンディによる台本に、ヘンリー・チェトル、トマス・ハイウッド、ウィリアム・シェイクスピア、トマス・デッカーおよび劇団の台本編集者1名が加筆したと推定されている<sup>(1)</sup>。マンディは、カトリックを弾圧した取調官として悪名高いリチャード・トップクリフに仕え、情報提供を行うとともに、エドモンド・キャンピオンら、イエズス会の宣教師を告発するパンフレットを書いた人物であった。

なぜ反カトリックの急先鋒ともいうべきマンディが、カトリックの殉教者トマス・モアを称える内容の芝居を書いたのだろうか？

実在のトマス・モアが処刑されたヘンリー八世の時代と異なり、この戯曲が書かれたエリザベス一世の時代(1558-1603)は、表向きに「順応」す

---

\*専修大学文学部教授

れば、内面の自由を認めるのが建前だった。『サー・トマス・モア』のモアは国王に忠誠を誓う「順応」精神をもったキャラクターである。それを生み出したマンディは、ヨーロッパ大陸に旅行し、ローマでカトリックの司祭を育成するイングリッシュ・コレッジに一時滞在した経験があった。そこでは周囲への順応を余儀なくされる。イギリスに戻ってからは、ローマからの帰国者であるということで疑念をもたれるのを払拭するために、カトリック弾圧に加担する以外の道はなかったと考えられる。そんなマンディが理想の人物として造形したのが、順応精神をもちながらも信念をつらぬいたモアだったのだろうか？ だが作者の問題に立ち入る前に、まずはこの作品がどうして存在できたのか、その概要と特徴、それに対する検閲の状況についてみてみたい。

## 1 『サー・トマス・モア』のテキスト

『サー・トマス・モア』はモアの出世から処刑に至る経緯に、私生活の様子をはさんだ構成を取り、常にユーモアを持ち続けながら信念をまげなかったモアの人物像を描いた「賢人劇」である（佐野 61, Honigmann 77）。第1幕、第2幕は、1517年に起きた「血の五月祭事件」（‘Evil May Day’）を背景にする。ロンドンに住む外国人たちの傍若無人ぶりに耐えかねた市民や徒弟が暴動を起こすと、市司政官のモアがかり出され、暴徒を説得する。モアは功績が認められ大法官に出世する。

第3幕ではモアのもとをエラスムスやロンドン市長が訪れる。市長に対しては、旅芸人の一座に『「機知」と「英知」の結婚』というインターロード（寓意的な芝居）を演じさせ、それにモア自身も参加してもてなす。私生活におけるモアのユーモラスな側面が強調される。

第4幕、第5幕では、枢密院のメンバーが国王の書状への署名を求められる。サリー伯、シュルーズベリー伯は署名するが、ロチェスター司教

ジョン・フィッシャーは拒否する。モアは態度を保留し、大法官の職を辞して自宅軟禁になる。モアは、サリー伯とシュルーズベリー伯、そして家族から説得されるが、署名に応じず、ロンドン塔に送られる。彼は処刑の場に臨んでも、落ち着いていてユーモアを失わない。

この作品の主な材源としては、まずシェイクスピアもよく使ったホリンシェットの年代記（エイブラハム・フレミングらが加筆した1587年版）が挙げられるが、それと並んで重要なのが、カトリックへの揺り戻しを図ったメアリー一世の治世下（1553-58）でカンタベリー寺院の大助祭を務め、異端審問も行ったニコラス・ハープスフィールドのモア伝（1557頃）である。この本は、1582年、トップクリフがトマス・モアと同名の孫を逮捕したときに、その蔵書のなかから見つかった。それはモアを殉教者として称える一種の聖人伝だが、マンディがトップクリフのもとでカトリック狩りに携わっていたからこそ入手できたテキストだった（Hamilton 122-23）。逆説的だが、マンディが『サー・トマス・モア』を書いても怪しまれることがなかったのは、そのような立場にいたためと推測できる。

当然、原稿を書くにあたっては、当局への配慮がなされたと考えられる。芝居には国王ヘンリー八世は登場しない。またモアが署名を求められた書状は「継承法」（王の再婚相手アン・ブリンが生む子供に継承権を与えるもの）と推定されるが、その内容も明かされない。ガブリエーリとメルキオーリは、それによってカトリックと国教会の対立の問題が回避され、世俗の権力に対する個人の良心と自由がテーマになっていると言う（Gabrieli and Melchiori 15）。原稿が執筆された当時、そのような内面の自由は、少なくとも建前においては保証されていた。エリザベス女王の治世の特徴は、限られたかたちであったにせよ、宗教的寛容にあった（Knapp 145-46）。「女王陛下は、即位にあたって、ローマ教会の暴虐、すなわち恐怖と厳格さによって人の信仰と良心を支配するやり方を嫌悪された」とフランシス・ベーコンは言う。父ヘンリー八世の治世においては、国王至上権の誓

約を拒むことは「特段の事情がない限り、反逆行為となった。しかし、それとは対照的に、女王陛下は、人の心や密かな思いをのぞき込むことを好まれず、ただそれが表にあふれ出て、明確な行為や主張となり、女王陛下の至上権に異議を唱えたり、疑問を差し挟んだりし、国外の権力を支持・称揚して明白な反抗におよんだ場合にのみ、それをおさえるべく限定的に法を適用されたのである」(Bacon 71)。異端審問を行うカトリックに対し、イングランド国教会はコンフォーミズム (Conformism) の宗教政策を採った。フォーム (かたち) を合わせれば、内心は問わないということで、それはカトリックからの改宗を促す戦略でもあったのだ。

『サー・トマス・モア』の登場人物としてのモアは、柔軟にコンフォームする人物である。対照的なのが、書状への署名をきっぱり断ったロチェスター司教フィッシャーだが、そのフィッシャーですら、説得するサリー伯とシュルーズベリー伯に、身柄はロンドン塔長官に預けても、「我が思いは、王とあなた方のもとにあります、フィッシャーが生きている限り」(VI. iii. 21-22) と述べる。ロチェスター司教と比べ、モアはさらに順応性が高い。彼は王に対する忠誠心を失わず、いまわの際でも「陛下は私にたいし、いつもよくしてくださったことを告白します。(…) 罪のつぐないに、この頭を謹んで陛下に差し上げます (…)」(V. iv. 71, 75) と感謝のことばを述べ敬意を示している。

ではこの作品に対する検閲はどのように行われたのだろうか。台本には祝典局長ティルニーによる検閲のあとが残っているが、それによると、第4幕第1場の、ロチェスター司教が書状への署名を拒否し、モアが態度を保留する場面のうち、81行目から105行目を全面的に書き換えるよう求めていたことがわかる。

その箇所は、書状への署名を拒否したロチェスター司教に対し、パーマーが「それでは、この場でただちにあなたを召喚し、陛下に謁見のうえ、このゆゆしき侮辱 (capital contempt) の釈明をしていただきます」(81-

83) と言うところから始まる。そのあとモアが態度を保留して自宅待機を申し渡される。モアは「喜んでそういたしましょう。みなさん、チェルシーの拙宅にお立ち寄りのお際には、みなで釣りに出かけましょう。(…)なに、これでいいのです。太陽よこんにちは、国家よさらば、というわけです」(97-98) と言って退場する。その後、サリー伯とシュルーズベリー伯が署名する。パーマーがもう一度「ロチェスター閣下、ご同行いただいて、この侮辱 (contempt) の釈明をしていただかねばなりません」(101-02) と告げ、二人が退場。そのあとのサリー伯の台詞の冒頭「では陛下のもとに (一部欠落) まいりましょう」(105) までが変更の対象になっている。

該当箇所直前79-80行目でロチェスター司教が署名を拒否するところはチェックされていない。ティルニーは、この行為を歴史的事実と認めたとうえで、それを王に対する侮辱であると言うパーマーの台詞のほうを問題視したようだ。またモアのいくぶんふざけた台詞にも国家をないがしろにするニュアンスを感じ取ったと推測できる。

モアの失脚から処刑までを描いた第4幕以降では、モアが、「王は私の運命の医者になって、直してから、もとに地位につかせようというお積もりらしい」と述べたあと、「医術ガ汚レタトコロデハ、治療ヲ受ケルノガ厭ワシイ」とラテン語でセネカを引用するくだりがある (IV. iii. 79-83)。ここは唯一、モアが王への批判を口にしてしている箇所である。マンディはラテン語の引用というかたちで、直接性を回避したと考えられるが、ティルニーはこの引用を削除している。

このようにティルニーは体制批判につながる箇所には敏感だったことがわかる。しかしモアの人生を描くこと自体には反対せず、己の信念をつらぬくモアを称えることも気にはしなかった (Knapp 149)。

ティルニーが最も神経をとがらせたのは、第1幕、第2幕の暴動の場面だった。台本の最初のページの余白には、E・ティルニーの署名入りで

「暴動全体およびその原因（一部欠落）は削除し、サー・トマス・モアが市長立ち会いの法廷に臨むところから初めよ。（…）従わない場合は身に危険があるものと心得よ」とある。これは外国人たちが傍若無人に振る舞う第1幕第1場を削除せよ、と言う意味である。1517年の「血の五月祭事件」は決して過去の出来事ではなく、経済的要因からくる外国人排斥運動は1580-90年代に繰り返し起きており、「血の五月祭事件」を芝居で扱うことは、その運動をおおる危険性があったのである（Gabrieli and Melchiori 11, 佐野 74）。

この芝居の上演記録はなく、結局、舞台に上げられることはなかったものと思われる。残された清書原稿には数々の検閲と改訂の痕跡が見られるが、ティルニーがもっとも強い調子で削除を求めた第1幕第1場はそのまま。ティルニーが結局、上演を認めなかったのか、あるいは（上演禁止命令も見つかっていないことから）劇団側が、芝居の成立もしくは成功には第1幕第1場は不可欠と判断して上演を断念したものと考えられる（佐野 64, 85）<sup>(2)</sup>。

## 2 アントニー・マンディとカトリック

アントニー・マンディ（1560-1633）は、織物商の息子としてロンドンに生まれた。彼が受けた教育については、1570年代に、クローディアス・ホリバンドというロンドン在住のユグノーから、ラテン語、フランス語、イタリア語を習ったことがわかっている。76年に8年契約でカトリックに共鳴する出版業者ジョン・オールディーの徒弟となる。だが78年に徒弟をやめて、友人のトマス・ノーウェルと大陸に渡り、フランス、イタリアを旅したあと、79年2月から6月までローマにあるイングリッシュ・コレッジに滞在した。これはカトリックの聖職者を養成するイギリス人向けの神学校である。マンディはこのときの体験をのちに『イギリス人のローマ生

活』（1582, 90）で詳述している。

イギリスに戻ったマンディは、その後、1581-82年に反カトリックの政治的パンフレットを5冊出す。そして1580年代を通じてカトリックを弾圧した取調官トップクリフの右腕として働くのだ。

マンディがこのような行動を取ったのは、イングリッシュ・コレッジから戻った人物ということで、当局から目をつけられていたからと推測できる。彼は自分が得た情報を当局に提供することで、有利な立場への逆転を図ったのだろう。『タイボーンでの反逆者たちの処刑についての簡潔で正確な報告』（1582）の献辞で彼は、「私自身、ローマその他の場所で、彼らと過ごしたことがあり、知己を深めるなかで、彼らの反逆の意図と傾向を知るに至った。以前、彼らを批判する立場から、その面前で証言台に立って証言したとおりである」（A2）と述べている（Hamilton 31. Lockey 105-07）。

彼が著したパンフレットのなかで最も有名なのが『エドマンド・チャンピオンと共謀者たちの恐ろしい反逆の暴露』（1582）だ。エドマンド・チャンピオンは、イエズス会士でプラハの司祭だったが、ローマのイングリッシュ・コレッジのメンバーを伴って、1580年6月にイギリスに戻り布教活動を始める。しかし反逆を企てたとして逮捕され、81年12月に処刑された。マンディはチャンピオンらに不利な証言をし、処刑後、彼らを断罪するパンフレットを発表したのである。

このパンフレットでマンディは、チャンピオンらが女王の暗殺と政権転覆をもくろんで、密かにイギリスにやってきたと主張する（B2）。私はローマに行ったとき、教皇の学生として認められ、神学校で生活した。そこで聞いたことをすべて報告したら節度を超えてしまうだろう、と彼は言う（D1v）<sup>(3)</sup>。だが神学校でのうわさでは、ほどなく司祭たちが人心を掌握するためにイギリスに派遣される、その頃プラハにいたチャンピオンがその中心人物ということだった。マンディは、チャンピオンの言い分も紹介し、

イギリスに派遣されたのは、人々の魂を救い、祖国に益するためで、反逆するためでないとの彼の主張を引用する (E1v)。しかしチャンピオンらは、イギリスでどう振る舞い、尋問されたらどうはぐらかすかを記したラテン語のマニュアルを携帯していた、とマンディは言う (E3)。それによると、エリザベス女王について聞かれたら、エリザベスは法にのっとった君主で、我々は彼女に従う、と答えることになっている。またもし教皇が女王と反対のことを命じても女王に従うか？との問いには、我々の良心を責めてほしくないし、良心のなかまで足を踏み入れるべきではない、教皇は女王の意に反する命令はしないと信ずる、と答えるよう記されているという。この問いは実際にチャンピオンに対してもなされた。彼は、マンディの指摘するマニュアルと同じく、良心のなかまで足を踏み入れるべきではないと答え、良心の問題を決める法廷は法廷ではない、その問いは良心に関わるので答えられない、と返答した。これについてマンディは、チャンピオンが反逆のために来たことをよく自覚しているながら答えをはぐらかしているのだ、と言い、その狡猾な態度から邪悪な意図があることは明白だと主張する。入国前に彼らが同意し決意していたことは、女王の暗殺と、その統治の破壊だった。入国したらイギリス国民をたぶらかして、政権転覆に誘導し、それと平行して女王暗殺を遂行する。以上のことは多くの証拠、証言、彼ら自身の告白や記述から証明されている、と彼は結論づける (F4)。このようにチャンピオン側はコンフォーミズムを主張しているにもかかわらず、マンディはその裏に反逆の意図があると断罪するのである。

このパンフレットには付録として、「イエズス会士エドマンド・チャンピオン、神学校司祭ラルフ・シャーウィンおよびアレグザンダー・ブライアンの死に関する小論」という短い文書がついており、この三人の処刑の様子が述べられている。チャンピオンは無罪を主張したうえで、自分はカトリックの司祭であり、その信仰でこれまで生きてきて、その信仰をもって死ぬ覚悟であると述べる。エリザベス女王にたいする反逆に関しては、

彼女が自分の正当な主君であり女王であると語った。処刑に際して、彼は英語で祈ることを拒んでラテン語で主の祈りを唱え、女王に許しを乞うよう言われてもあいまいな答に終始し、牧師から、悔い改めた罪人のしるしを示すよう求められると、ひと言、あなたと私は宗旨が違いと答えたという。裁判で決められたとおり、彼は命が絶えるまで、絞首台に吊され、ロープを切って下ろされると、内蔵を出されて四つに裂かれた。

これに対し、ラルフ・シャーウィンはより判断力と学識があり、より従順で、英語で主の祈りを唱えた。女王に赦しを求め、女王の長寿と統治を望むと述べた。いっぽうアレグザンダー・ブライアンは頑迷で不敬であるように見え、改悛と心からの謙遜のしるしをほとんど見せなかった、とマンディは言う。ガブリエーリとメルキオーリは、絞首台でのシャーウィンの威厳があって落ち着いた態度の描写が、『サー・トマス・モア』のモア処刑の場面につながったと指摘している（15）。このラルフ・シャーウィンこそイングリッシュ・コレッジでマンディが窮地に陥ったとき、彼のために尽力した人物なのである。

### 3 大陸旅行の動機

マンディはなぜ徒弟奉公を中断して、大陸に旅行し、ローマのイングリッシュ・コレッジに滞在したのだろうか？ 帰国後の最初の作品である詩集『無常の鏡』（1579）の序文で彼は、「来たる時にそなえて、語学の知識を習得したかった」（7）と留学の動機を述べている。また『イギリス人のローマ生活』では「知らない国々を見たいという欲求、語学を学びたいという気持ちから、母国を離れる決意をしたのであり、それ以外の意図や原因はない。神が証人である」（5）と主張している。しかし単に物見遊山や語学留学のために、年季も明けぬうちに国を出ることは可能だったのだろうか？ 帰国後カトリックを摘発する仕事に関わったことから、彼はス

パイとして派遣されたとする説もある（中條 754）。たしかにマンディは、チャンピオンらの裁判で、被告のひとりヘンリー・オートンから、「海を渡って巡礼の旅に出、秘蹟を受けてカトリックになった」のに、この法廷では「新たな仮面を被り、プロテスタントを演じている」と批判されると、カトリックに共鳴しているように見せたのは、「彼らの裏をかき、目的を調べるためだった」と証言している（Simpson 430）。ただエアズはこの主張には信憑性がないと言う。しかし当局側の誰かから、大陸に亡命したカトリックの動向に注意を払うよう、非公式に求められた可能性はあるとしている（Ayres xiv）。一方ライトは「スパイではなくカトリック改宗者として」マンディは大陸に渡ったと言う。1578年頃マンディのパトロンになったオックスフォード伯はカトリック・シンパで、彼のアドバイスでマンディはローマに行き、神学校に入ったとライトは推測する（Wright 155）。帰国して最初にマンディが書いた『無常の鏡』は、徒弟奉公を途中で投げ出されたにもかかわらず、カトリック寄りのジョン・オールディーが出版しており、またこの本はオックスフォード伯に献呈されている。

1578年から81年にかけて、エリザベス女王とアンジュー公フランソワとの結婚交渉が進められた。イェズス会はこの縁談に乗じて宣教師を送り込んだが、チャンピオンもそのひとりだった。イギリス国内では、結婚賛成派と反対派に分かれ、オックスフォード伯、ヘンリー・ハワード、チャールズ・アランデル、フランシス・サウスウェルらは賛成派、反対派の代表格がレスター伯だった。1580年の年末もしくは81年の年始に、レスター伯はチャンピオンを追う官憲と連携し、賛成派の勢いをそごうと、オックスフォード伯がヘンリー・ハワードの姪を誘惑したというスキャンダルを暴く。するとオックスフォード伯は1576年からカトリックに共鳴していたことを女王に告白して棄教。赦しを乞うために、ハワード、アランデル、サウスウェルがカトリック・シンパであることを明かした。そのため彼らは当局の監視下に置かれることになる（Hamilton, 2-3）。オックスフォード

伯の失脚にあわてたマンディは、カトリック宣教師を狩り出すほうに身を転じた、とライトは見る (Wright 157)。そして『エドマンド・チャンピオンと共謀者たちの恐ろしい反逆の暴露』をレスター伯らに献呈する。だがライト自身も指摘しているようにマンディはローマに行ったものの、幻滅して帰国している (Wright 155)。『無常の鏡』のオックスフォード伯への献辞でも、彼は自分の大陸旅行に触れ、大陸に到着するとほどなくして、(宗教戦争の混乱で追い剥ぎと化していた) 兵士たちに身ぐるみ剥がされ、期待が裏切られたと述べている。その後は、さまざまな人に親切にもらったが、彼らからカトリックへの改宗を勧められたことをほのめかしている。パリで会ったイギリス大使からは、このままでは「敵の友となり、祖国の敵となって、飢えたオオカミのなすがままになり、祖国から引き離されるばかりでなく、肉体も魂も天上の至福から遠ざけられてしまう」と警告されたという (7-9)。仮にマンディがカトリックに共感して大陸に渡ったとしても、帰国時までにはカトリックから離れていたとみるべきだろう。その状況を『イギリス人のローマ生活』で詳しく見てみたい。

#### 4 ローマ到着まで

マンディは『イギリス人のローマ生活』で、大陸旅行とローマのイングリッシュ・コレッジでの体験を詳述している。それは大陸に亡命していたカトリックのイギリス人の動向や当時のイングリッシュ・コレッジでの生活ぶりを知るうえで大変興味深い資料である。しかし客観的なルポルタージュではなく、自分が反カトリックの立場に立っていると弁明するために書かれたもので、多分に自己防衛的だ (Ord 45)。そこで述べられている旅行の動機が額面通りには受け取れないように、その記述は全編にわたって、いわゆる「信頼できない語り手」によるものであることを意識して読んでいく必要がある。

第1章はローマ到着までの旅行記になっている。マンディは友人のトマス・ノーウェルとフランスに渡るが、アミアンに向かう途上で、追い剥ぎと化していた兵士の残党に身ぐるみ剥がされてしまう。なんとかアミアンに着くと、ふたりはカトリックの老司祭ウッドウォード師に助けをもらう。彼は親切にしてくれたが、教皇をほめ、女王と枢密院をけなして、彼の話にはイギリスへの反逆の意志が読み取れた、とマンディは言う(9-10)。編者エアズの注によると、1581年以降、エリザベスの暗殺計画は確かにいくつかあったが、マンディが大陸に渡った1579年初めの時点でそのような陰謀があったかどうかは疑わしい。ただしカトリックの亡命者が、エリザベスを何らかの形で排除したいと漏らす可能性はあったという。

ウッドウォードは、ランスにいるカトリック亡命者の代表格ウィリアム・アレンへの手紙をマンディらに託しそこの神学校への紹介状を書いてくれる。ノーウェルはそれをアレンに届けることを主張するが、マンディはこのままカトリックに洗脳されることの危険を感じ、ノーウェルを説得してパリに向かうことにする。パリではイギリス大使に会い、アレン宛の手紙を渡す。大使からはイギリスに帰国するよう言われる(11-14)。もしマンディがカトリック信者として最初からローマの神学校を目指していたとすると、パリでわざわざイギリス大使に会い、ウッドウォードがアレンに宛てた手紙を渡してしまうのは不自然に思われる。この手紙には「彼がイギリスについて耳にした情報、彼らの目的にとって事態がどう進んでいるか、その他、みなを読むにふさわしくないので、ここでは口にできないこと」が書いてあったという(11)。そのような密書をウッドウォードが初対面のマンディに託すかどうか疑問だが、イギリス大使に会ったこと自体をでっちあげることはできないだろうから、彼が当初から諜報活動をしていたという見方もあながち否定できない。少なくともこの時点で、マンディはカトリックに過度に関わることの危険性を感じていたものと思われる。だがマンディとノーウェルは大使の忠告には従わなかった。

パリの町では何人かのイギリス人に会い、とても親切にされるが、彼らから女王陛下と枢密院を非難する言葉を聞かされる（14）。また彼らは、マンディをあるカトリックの郷紳の息子と勘違いするが、好都合なのでマンディはその人物に成りすますことにする（19-20）。そして彼らからローマに行くことを熱心に勧められる。マンディはローマに行けば帰国しやすいと考え、ローマに向かうことにした、と偶然の成り行きでローマに行くことになったように書いている（16）。

ローマに到着するまで、経由したさきぎきでマンディとノーウェルはイギリス人亡命者にもてなされる。いろいろな場所で聞いた話から、女王と国に対する反逆について広い合意があったとし、それを決定しているローマは「地獄そのものと判断できよう」とマンディは言う（21）。

## 5 イングリッシュ・コレッジでの生活

第2章以下、ローマのイングリッシュ・コレッジでの生活が描かれる。マンディとノーウェルは、校長ドクター・モリス（本名は Maurice Clenocke だが、マンディは一貫して Doctor Morris と呼ぶ）の許可を得てコレッジに滞在することになる。

ひとりの司祭がマンディの偽名から父親を知っていると思い込んで話しかけてくる。ただローマを見たくてやってきました、と言うマンディに、司祭は、ここに来る人はみな、真剣にカトリックの信仰を求めてやってくる、教皇のために生き、そして死ぬことがここに来る人の目的であると言う。またエリザベス女王をののしり、ポケットからブラックリストを取り出して、ウィリアム・セシル、レスター伯、ウォルシンガムらの名を挙げる。「そのような事柄に関して、私は未熟者です」とマンディが言うと、君が野放図に育てられたとしても、子供の頃私とミサや告解で同席しているし、いろいろな司祭がお宅を訪れていたはずだと司祭は具体的に名前を

挙げる。マンディは、自分の父とされている人のことさえ知らず窮地に立たされる。しかし彼は、子供の頃の自分は信心深くなかった、あなたが去ってしばらくして、生家を出てロンドンの親戚の家に住み、フランス語を学んだ、父の勧めもあってパリに行くことにしたなどと言い逃れをしてなんとか切り抜ける（24-33）。

第3章では、コレッジでの生活が描かれる。さまざまな規則があり、朝ベッドの寝具をきれいにたたまない、祈りのときにひざまずかない、学校に行く前とあとにミサを聴くのを忘れる、などの行為にたいし、夕食の場で説教壇から懺悔する、ホールの真ん中でひざまずき祈りを唱える、立って足もとにポリッジの皿を置きひとさじずつすくっては立ち上がって口に運ぶ、食事の品数を減らされるかあるいは全く食事を与えられない、などの罰が加えられた。マンディはいつも何かしらの規則を破って罰を受けていたという（37-38）。

マンディが特に嫌悪したのは、悔い改めの苦行としてのむち打ちである。贖罪司祭の指示により、苦行者は、夕食の場で、両目の穴と背中が大きく開いたフードを被り、血が流れるまで自分の背をむち打ちながらホールを回るのだという。さらにイエズス会士は自ら進んでむち打ちをする。マンディがやろうとしないので、あるイエズス会士が彼の前でやってみせ、実際にやってみると苦痛ではなく、喜びだと言って勧めたという。語り手のマンディは全くの愚行だと切り捨てている（38-40）。

第4章では、「教皇が、虚飾を維持するために、多くの人をあざむき、ほろ儲けをしているローマの聖遺物についての簡潔な説明」（46）と銘打ち、課外活動で訪れたローマの教会で見た聖遺物が、風刺的でコミカルな口吻で列挙される。たとえば、サン・ジョバンニ・イン・ラテラノには、ペテロがイエスを否認したときに鳴いた鶏が止まっていた丸い石柱があるが、それは最近できたように見えると言う。また祭壇のなかにマリアの乳が保存されていて、混じり気がなく甘いまま保たれている。ペテロとパウ

口の頭部があり、毛が生えている。キリストをはりつけにした釘には新しい血がついている。聖遺物箱は、水晶でできたものを除いてなが見えないが、水晶の箱には腐った骨が入っていた。サンタ・マリア・マッジョーレには、幼子イエスが寝かされたまぐさおけ、マリアの髪の手、聖トマスの指、十字架にかけられたキリストの脇腹を刺した槍の先端、ユダがキリストを裏切って得た金の一部等がある。サンタ・クローチェにはキリストをはりつけにした別の釘が保存されていたが、そこについている血もまだ新しいとされていたと言う（48, 52-56）。

## 6 イングランド出身者の反乱

イングリッシュ・コレッジ滞在中に、マンディはイングランド出身の神学生たちが、ウェールズ出身の校長ドクター・モリスにたいして起こした反乱の当事者となる（第6章）。ドクター・モリスがウェールズ出身者をえこひいきするので、イングランド出身の学生たちは、イエズス会士による学校運営を望んだ。当初マンディらを歓迎していたように見えたドクター・モリスは、「なぜかわからないが私に立腹し、これ以上コレッジにとどまることは許容できないと言った」（80）。イングランド出身者たちは、それを認めるとじきにウェールズ出身者のみになってしまうとマンディを引き留める。加えて、もしマンディがコレッジに受け入れられずにイングランドに帰り、ローマから来たことを知られたら、ローマに誰がいたかを自白させられ、自分たちの親や友人に迷惑がかかり、自分たちも帰国できなくなると彼らは考えていたという。モリスは学校を統括するモローネ枢機卿に訴え、いっぽう、イングランド出身の学生たちは、校長をモリスからイエズス会士に代えるよう要求する。モローネは、モリスは立派な校長だと、神学生らを叱責する。これにたいし、コレッジ内でたぐいまれな学者と評価されていたシャーウィングが、モリスによりイングランド出身者が

不当に扱われていること、イエズス会士を校長に望むこと、さもないとコレッジ内の不和がイギリスに知られてしまう恐れがあることを雄弁に訴える(81-85)。

マンディはもう少しでコレッジを出なくてはいけなくなる場所だったが、イエズス会士のとりなしで、2週間滞在できることになる。だがその部屋は汚臭の漂うトイレのとなりで、乞食と一緒に道で寝るほうがましだったと彼は言う。そのいっぽう毎朝、司祭や神学生が訪ねてきて、食事が提供されないマンディに、町に行って食べ物を買うお金をくれたという(86-87)。

その後、イングランド出身者たちは実力行使に出、全員でコレッジを出て、ローマ在住のイングランド人の家にやっかいになる。イエズス会士のアルフォンソ神父が教皇グレゴリウス十三世の命でやってきて、神学生たちは教皇に謁見することになる。教皇はラテン語で、君たちが君主のもとを去って自分のところに来てくれたことをありがたく思うと言い、私は君たちの避難所、砦、導き手、父であると述べた。神学生のひとは、感動して、こんなに先見の明のある父の祝福を受けたら、友も物も命そのものも捨てるとマンディに話したという。だが語り手としてのマンディは、「教皇は、口を開く前に、うわべを装った偽善的な表情で涙を流した」とか、「悪魔が望みを満たすための欺瞞の数々を見よ、涙、なめらかな語り、寛大さ…」と、そのときの教皇の態度を全否定している(92)。

「なにが原因で君たちは私のもとから離れていこうとするのか」と問う教皇にたいし、シャーウィンが、モリスの仕打ちのひどさを話し、イエズス会士による学校運営を望んでいることを訴える。この謁見の結果、モリスは解任され、イエズス会士のアルフォンソ神父が校長になる。マンディとノーウェルは、教皇の承諾で神学生としてとどまることになる。マンディは不潔な部屋で寝泊まりしたために体調を崩したので、清潔な部屋に移され、回復するまで神学生たちの世話を受けた(93-94)。

コレッジで起こった一連の騒動の記述を見ると、マンディはシャーウィンを初めとするイングランド出身者、イエズス会士、そして教皇に助けられたことがわかる。周囲の人々のマンディへの優しさが伝わってくる書きぶりだ。悪役はドクター・モリスとモローネ枢機卿だけである。マンディが汚い部屋で不気味な物音を聞いたときに頼った、サー・ロバート老司祭はウェールズ出身者だったが、ロウソクを手にも急いで駆けつけようとしてこぼし、けがをしたという（88-89）。教皇にたいする激しい非難のコメントもとってつけたような印象を与え、教皇の行動の描写そのものからその偽善性が浮かび上がってくることはない。

## 7 アトキンズの殉教

『イギリス人のローマ生活』の最終第8章は、マンディの体験談ではなく、彼の帰国後、ローマで火あぶりになった、プロテスタントのイギリス人リチャード・アトキンズの殉教の話である。この章には「キリスト教徒の苦しく無慈悲な殉教の真実の報告、(…)彼は福音の真実のために、(…)極端な責め苦と死の残酷な苦しみに耐えた (…)」という長いタイトルがついていて（100）、残酷な処刑の描写のあとには「このようにキリストの信心深い戦士にして殉教者は死んだ。彼は疑いもなく、主の栄光に与り、神は我々みなにそれに与れるよう約束してくださっている。アーメン」（103）との結びのことばがくる。だがアトキンズの取った行動は、極めて挑発的で、郷に入っては郷に従えのマンディの行動とは正反対だった。

アトキンズは1581年の夏、ローマにやってきてイングリッシュ・コレッジの門を叩く。神学生たちは、彼を歓迎したが、彼はいきなり「私が来たのは、あなた方の生活の乱れを責め、あなたがたの反キリストが天主を不快にし、神の栄光を奪い、全世界を冒瀆で汚し、木石をあがめ、愚かな偶像にすぎない聖体をあがめていることをあなた方に理解させるためだ」と

言い放つ (100)。彼は異端審問にかけられるが釈放される。ある日彼は、通りで聖体を運んでいる司祭に出会うと、それを取って捨てようとする。が失敗し、単に敬虔の念から聖体をつかもうとしたと思われる。数日後、彼は、サンピエトロ寺院で人々がミサを挙げているさなか、祭壇に立って聖杯とワインを投げ捨て、司祭の手からホスチアを取ろうとした。その結果、牢獄に入れられ取り調べを受けるが、そこで彼は、教皇の邪悪さと人々の偶像崇拜を非難するための意図的な行動だったと主張。自分は火あぶりの刑を喜んで受ける、そうすれば神の栄光に与ることができる、と言う。イングランド出身者たちが説得を試みるが、彼は聖書を引用して反論する。その後ろばに乗せられ、処刑の場へ連れていかれる。イングランド出身の祭司が話しかけても無視し、人々に、魂の救いを求めよ、と言ったという。そして処刑の場では、苦痛を増すよう、残酷にも足から順に焼かれても、気絶もせず、叫び声もあげず、ずっとほほえんでいたという。

以上は、イングリッシュ・コレッジでマンディと一緒にいたジョン・ヤングが、直接事件を目撃した彼の師ドクター・モートンから話を聞き、事実として語ったことに拠る (マンディが、帰国したヤングにいつどのように会って話を聞いたのかについては述べられていない)。ヤングは、アトキンズには「悪魔が取り憑いていたと確信する」(104)と言う。これに対しマンディは、ヤングやモートンは、彼らの主人である教皇に逆らった物言いをしないのだとし、「いつか必ず、アトキンズの行為が実を結ぶ時が来る。そのために教皇とその忌まわしい行いを拒み、神と女王陛下への義務を果たし、兄弟として団結しよう」と述べる (104)。

このようにマンディは殉教者としてのアトキンズを称えるが、アトキンズの行動はマンディのコンフォーミズムとは相容れない。オードは、マンディがここで、アトキンズの行動はプロテスタントの殉教者としては正しいが、プロテスタントの旅行者としては間違っていることを示そうとしている、と指摘している (Ord 55)。

## 8 マンディのコンフォーマリズム

マンディは第5章で、イングリッシュ・コレッジでの自分の態度を弁明している。彼は周りからプレッシャーを受けても、女王や王室を悪く言ったことは一度もなく、故郷を遠く離れていても、神のおかげで、臣民として君主を敬うことを怠ったことはない、と言う。彼の敵は、おまえはミサに行ったのではないかと非難するが、ローマでは、特に神学校では、自分の思い通りに生きることはできない。「好意は順応（conformity）によって得られ、頑迷さは死を招く」（66）と彼は主張する。イギリスにいる無分別な連中は、教皇以下、ローマの聖職者たちの不品行や迷信をあげつらうが、それはイギリスにいるからできることで、もしローマにいて、真のキリスト教徒が情け容赦なく処刑されるのを見たら私と同じようにするはずだ。「読者は、最近処刑された同胞たちの例を思い浮かべるだろう」（67）とマンディは言う。

文脈から言えば、処刑された同胞の例として、カトリックに同調しなかったアトキンズが挙げられてしかるべきだろう。ところが、マンディは続けて「その大義は神に認められず、自分自身でも納得していないのに、彼らは勇気を見せるために、そしてローマで殉教者に数えられるために進んで死のうとした。だが全世界が、その勇気のなかにあるのは偽りの気弱な心だと気づくだろう」（67）と言って、チャンピオンらが処刑の際に、うろたえ、震え、おののきながら死んだ様子を述べるのである。

この語りの論理のゆらぎ、矛盾に『イギリス人のローマ生活』の特徴がよく現れている。ローマで順応することなく処刑された同胞はアトキンズである。しかしマンディは、アトキンズを頑迷な愚か者とあからさまに断罪できず、勇気あるプロテスタントの殉教者として称えざるを得ない。そこでコンテクストを無視して、頑迷さゆえに死を招いた者の例として、キャ

ンピオンらを挙げ、火あぶりにされてもほほえんでいたアトキンズとは対照的に、死に際して恐れおののいた様子を描いたのである。この描写は『エドモンド・キャンピオンと共謀者たちの恐ろしい反逆の暴露』にはなかったものである。またマンディは、ここでキャンピオン、カービー、コタムの死にざまを描いているが、シャーウィンについては触れていない。

『イギリス人のローマ生活』では、周囲に順応し、他人になりすましながら、あくまで女王の臣民として、カトリックへの改宗や祖国に対する反逆の誘いには乗らなかったことが強調される。また修行としてのむち打ちに嫌悪感をあらわにし、聖遺物崇拝や奇蹟の話を愚かしいと切り捨てているが、ここはマンディの率直な気持ちとみてよいだろう。そのいっぽう、旅の初めから、彼はさまざまな人に助けられもてなしを受けている。そういう人々への警戒感も怠っていないが、特にイングリッシュ・コレッジの内紛に際してはシャーウィンを初めとする神学生たちがとても好意的に描かれている。

## 9 『サー・トマス・モア』におけるモアの人物造形

登場人物のモアの特徴はコンフォーミズムにある、と第1章で指摘したが、それは第4幕、第5幕の書状への署名保留から処刑に至る場面以外のところにも現れている。第2幕第3場でモアは「血の五月祭事件」を起こした暴徒たちに「規律 (form) に身を委ねて、治安判事に従いなさい。諸君が求めれば、きっとお慈悲が示されよう」(157-59) と言う。フォームに合わせれば死罪を免れると説くのである。実はこのシーンの冒頭からここ159行目までは、シェイクスピアの筆による。このモアの台詞を受け、マンディは、次のように続ける。

一同：手前どもは投降し、陛下のお慈悲におすがりします。

[一同、武器を置く]

モア：陛下はきっとお認めくださるだろう。(II. iii. 160-61)

シェイクスピアはマンディの原稿を書き直したと推測されている (Gabrieli and Melchiori 24)。オリジナルが残っていないので、マンディ自身が 'form' ということばを使ったかどうか不明だが、コンフォーミズムは『イギリス人のローマ生活』におけるマンディ自身の処世訓だったことを考え合わせると、モアが規律 (form) を説いて暴徒たちを説得するというのはマンディの当初の構想と矛盾しないはずである。

モアは寛容で、柔軟な発想のできる人物として描かれる。第1幕第2場のスリの裁判のエピソードでは、法廷でモアは被告のリフターに判事のシュアズビーの財布を掏るよう密かに指示して、シュアズビーに一杯食わせ、リフターの死刑を回避する。

第3幕第2場の旅芸人によるインタールードの場面では、モアは役者がひとり足りないとみるや「良き助言」役となって、即興で芝居に加わる。あとで役者のひとりが「みんな、(大法官さまの台詞を) 聞いたか? たぐいまれな役者じゃないかい? (…)」(II. 295-96) と言うと、別の役者が「黙れ、なんてことを言う? 大法官さまが役者だって? そんなこと言うもじゃねえ」(II. 300-01) と叱責する。だがモアは大法官の体面にこだわる様子はない。ナップは、ここに為政者のあるべき寛容な順応性 (conformity) が表されていると言う (Knapp 151)。

『サー・トマス・モア』の登場人物でモアをけなす者はおらず、モアはみなから褒め称えられる。

看守一：(…) あんなに賢くて徳の高いお方はイギリス始まって以来だ。

看守二：貧乏人たちは、あの方を埋葬するときには、涙にくれるだろう。おれは

生まれてこのかた、あんなにみなに惜しまれる人のことを聞いたことがな

い。 (V.i.10-14)

執事：(…) 正直に言ってよけりゃ、世界中であれほど他人を傷つけない方はいないね。

ビール造り：あれほど賢く、陽気で、正直なお方はいないさ。(V.ii.10-13)

モアは為政者でかつ国王の臣下であり、どちらの立場にあってもコンフォームするキャラクターになっている。だがモアが称えられることは、彼を断頭台に追いやった国王への批判につながる。またモアの台詞もすべてが王への忠誠心にあふれているわけではない。それが端的に現れたのが、ティルニーによって削除された、「医術が汚レタトコロデハ、治療ヲ受ケルノガ厭ワシイ」(VI.iii.83) というセネカからの引用である。ほかにもモアが死刑になることを嘆くローパーにたいし、「牢獄で暮らすのは、暮らしなんてものじゃなかった。ありがたいことに陛下はもっと目をかけてくださる。明日わたしはひと仕事すませば、自由になってどこでも行けるのだ」(V.iii.78-82) とモアが言うところなど、国王への皮肉と解釈できる。はっきりと表には出さないが、『サー・トマス・モア』では理想の為政者として、ヘンリー八世よりも寛容な為政者が求められていることが読み取れる。それが、コンフォーミズムを旨としたエリザベス一世だったのだろうか？

作者マンディは、作品においてこのような皮肉を効かせるいっぽう、実生活では上の者に順応することに徹した。すでに述べたように、ヘンリー・オートンから、マンディは、大陸でカトリックになったのに、法廷ではプロテスタントを演じており、「証言したり、死刑を主張したりする証人としてふさわしくない」と非難される (Simpson 430)。また彼は1588年に、「マーティン・マープレリト」の筆名で地下出版された国教会批判のパンフレットを書いたピューリタンの取り締まりにも関わった。筆者のひとり

とされたジャイルズ・ウィギングトンは、マンディが口外しないと約束して得た情報をすぐに報告したとして、彼のことを「たいした偽善者」であると証言している（Knapp 152, Jowett 14, Peel 253）。諜報活動をする以上、相手の裏をかくのは職務上の行為だっただろうが、マンディが、エリザベスの治世下で、死を招く「頑迷」を避け、その時々周囲の状況に「順応」することで保身を図ったことは確かだ。そんな彼が理想の人物として描き出したのが、目下の者には寛容な「順応」を示し、国王にも可能な限り順応精神を示しながら、信念を貫いて処刑されるモアだったのではあるまいか。

## 10 『サー・トマス・モア』とエリザベス朝の コンフォーミズムの問題点

『サー・トマス・モア』のモア像は歴史上のトマス・モアとはかなり異なっていた。実在のモアはおおらかでウィットに富む反面、異端に厳しく、プロテスタントを激しく責め立てた、という側面ももっていた（Greenblatt 74-76）。しかしマンディは、モアをカトリックでありながら、エリザベス時代の宗教政策の建前であったコンフォーミズムを体現するキャラクターに仕立て上げている。

それでは、このモアの造形には全くほころびはないのだろうか？ インターロード『「機知」と「英知」の結婚』に「良き助言」役として参加した彼は、「英知」のふりをして「機知」に近づいてきた美しい女が実は「虚栄」であると忠告する——「「機知」よ、うわべで物事を判断してはいけない。目はしばしば過ちを犯すものだ」（III. ii. 273-75）。ナップはこれを、体面にこだわらずに芝居に参加したモアのコンフォーミズムを示す台詞として引用しているが（Knapp 151）、文脈を踏まえればそうではなくて、コンフォームしている外見（「英知」‘Wisdom’）に惑わされず、相手の本性（「虚栄」‘Vanity’）を見抜け、とモアは忠告しているのだ。ここで

モアは人の内面にまで踏み込んでいることになる。この劇中劇は寓意的な芝居なので、モアの台詞は、外見に惑わされて軽はずみな結婚をするな、という以上のもっと普遍的な意味を帯びているはずだ。『エドモンド・チャンピオンと共謀者たちの恐ろしい反逆の暴露』において、マンディは、女王に忠誠を誓うチャンピオンが実は反逆を企んでいたと証言した。それにたいする判決では、「この者は常に虚栄心に満ちた想像（‘a vain glorious imagination’）で人生の針路を決め、常に有名になろうとした」という点が考慮され、「（判決の）この瞬間、彼の本性が暴露されたのである」と言う。またチャンピオンは、「ただ偽善の顔にのみふさわしい、虚栄心の仮面（‘visor of vanitie’）たる堂々とした表情をしていた」という（G1）。

このようにマンディは、チャンピオンに関しては反逆の証拠を挙げることなく、虚栄心ゆえに死刑になったと記述している。これは「恐怖と厳格さによって人の信仰と良心を支配する」ローマ教会のやり方を嫌悪し、「人の心や密かな思いをのぞき込むことを好まなかった」はずのエリザベス女王の治世下で、結局は内心の自由は担保されず、一旦危険と見なされるや、残酷で恐ろしい刑罰が下されたことを示していると言える。そのコンフォーミズムの限界が、『サー・トマス・モア』の一見無邪気なモアの台詞に垣間見えるのである。

本研究はJSPS 科研費 JP (19K21636) の助成を受けたものである。

#### 注

- (1) チェトルがオリジナル原稿執筆に関わった可能性も指摘されているが(Gabrieli and Melchiori 16, Jowett 5)、主な作者はマンディである。
- (2) ジャウイットは、検閲があることを考慮すれば、外国人排斥運動が最も盛んな時期に作品が書かれる可能性は低いとし、オリジナル原稿の作成年代を1600年頃と推定する。また検閲を受けての改訂作業が行われたのは、1603年のジェームズ一世の即位のあとで、すでに外国人排斥運動が下火になっており、それゆえ第1幕第1場もそのまま残ったと推測している (Jowett 5, 7)。

(3) マンディのパンフレットには頁数が示されていないので、折丁記号 (signature) で示す。D1v は折丁記号 D1 の裏面 (verso) の意。

- Bacon, Francis. 'Observations on a Libel'. *The Works of Francis Bacon*, vol. III. London, 1826.
- Harpfield, Nicholas L. D. *The life and death of Sr Thomas Moore*. Ed. Elsie Vaughan Hitchcock. EETS, 1932.
- Munday, Anthony and Others. *Sir Thomas More*. Ed. Vittorio Gabrieli and Giorgio Melchiori. Manchester UP, 1990. (本文中の引用はこの版に拠る)
- Munday, Anthony and Henry Chettle. *Sir Thomas More*. Ed. John Jowett. Arden Shakespeare, 2011.
- Munday, Anthony. *A breefe & true reporte, of the execution of certaine traytours at Tiborne*. 1582.
- . *A Discouerie of Edmund Campion and his Confederates, their most horrible and traitorous practices*. 1582.
- . *The English Roman Life*. Ed. Philip J. Ayres. Clarendon Press, 1980.
- . *The Mirrour of Mutabilitie*. Ed. Hans Peter Heinrich. Peter Lang, 1990.
- . *A second and third blast of retrait from plaies and theatres*. 1580.
- Peel, Albert, ed. *Seconde Parte of a Register*, vol 2. Cambridge UP, 1915, 2010.
- Bergeron, David M., 'Munday, Anthony', *Oxford Dictionary of National Biography Online*. 2004, 2007.
- Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-Fashioning*. Chicago UP, 1980, 2005.
- Hamilton, Donna B. *Anthony Munday and the Catholics, 1560–1633*. Routledge, 2005, 2018.
- Honigmann, E. A. J. 'The Play of *Sir Tomas More* and Some Contemporary Events'. *Shakespeare Survey* 42, 1990: 77–84.
- Knapp, Jeffrey. *Shakespeare's Tribe*. Chicago UP, 2002.
- Lockey, Brian C. *Early Modern Catholics, Royalists, and Cosmopolitans*. Routledge, 2017.
- Ord, Melaine. 'Representing Rome and the self in Anthony Munday's *The English Roman Life*'. *Travels and Translations in the Sixteenth Century*. Ed. Mike Pincombe. Routledge, 2004.
- Simpson, Richard. *Edmund Campion*. London, 1867, 1896.
- Wright, Celeste Turner. 'Young Anthony Munday Again'. *Studies in Philology* 56, 1959: 150–68.

玉木意志太宰・松田道郎訳『サー・トマス・モア』河出書房新社，1983。

佐野隆弥『『サー・トマス・モア』と検閲』太田一昭編『エリザベス朝演劇と検閲』英宝社，1996。

中條和夫「マンディ，アンソニー」『シェイクスピア辞典』研究社，2000。